



日本アフリカ学会の 創立に関わった諸団体と人々

日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会

「アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する」参考資料

2013年5月25日

東京大学駒場キャンパス13号館1323教室



日本アフリカ学会創立50周年記念事業実施委員会 [編]

日本アフリカ学会の創立に関わった諸団体と人々

日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会
「アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する」参考資料

目次

日本アフリカ学会の創立に関わった諸団体と人々 …… 3

川端正久・北川勝彦・栗本英世

はじめに	3
1 日本アフリカ学会の創立	3
2 日本アフリカ学会の会員	7
3 「アフリカ研究会」の会員	10
4 「名古屋大学アフリカ調査研究会」の会員	13
5 「京都大学アフリカ研究会」の会員	15
6 発起人代表	17
7 アフリカ研究機関	18
おわりに	19

日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会

アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する …… 20

プログラム

資料集 …… 21

資料1 長谷川秀治「日本アフリカ学会の発足にあたって」(1964)	23
資料2 小堀巖「アフリカ学会の誕生 調査研究の一里塚に」(1964)	24
資料3 浦野起央「日本アフリカ学会創立大会 学会の誕生と大会報告」(1964)	25
資料4 長谷川秀治「発刊の辞」(1964)	28
資料5 西野照太郎「創刊のことば」(1963)	29
資料6 第4回学術大会集合写真(1967年4月、京都国際会議場)	30
資料7 第4回学術大会集合写真対応氏名	30

日本アフリカ学会の創立に関わった諸団体と人々

日本アフリカ学会会長 **川端正久**

日本アフリカ学会元会長 **北川勝彦**

日本アフリカ学会理事 **栗本英世**

はじめに

1964年に創立された日本アフリカ学会は創立50周年を迎える。東京大学駒場キャンパスで開催される日本アフリカ学会第50回学術大会において日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会「アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する」を実施することになった。この小冊子は、記念公開講演会の参考資料として編集されたもので、日本アフリカ学会の創立の経緯と創立年度の会員、日本アフリカ学会の創立を支えた3つの研究会——「アフリカ研究会」「名古屋大学アフリカ調査研究会」「京都大学アフリカ研究会」——の概要と会員について紹介している。創立50周年記念公開講演会の参考になれば幸いである。

1 日本アフリカ学会の創立

日本アフリカ学会は1964年4月に創立された。日本アフリカ学会『アフリカ研究』(第1号、1964年12月20日)に掲載された「学会記事」によれば、日本アフリカ学会の創立の経緯については、次のとおり記述されている。

日本アフリカ学会創設の経過 昭和39年1月、アフリカ学会設立準備会が発足し、3月には今西錦司、岡正雄、小堀巖、中山正善、西野照太郎、長谷川秀治、福永英二、松沢勲の各氏を発起人代表とする43名の発起人により日本アフリカ学会の設立がなされた。

創立された日本アフリカ学会の役員は次のとおり記録されている。

役員人事 発起人会の審議を経て、昭和39年度は暫定的に次ぎの如く決定した。

理事 今西錦司(京都大学)・岡正雄(明治大学)・小堀巖(東京大学)・中山正善(天理大学)・西野照太郎(国立国会図書館)・◎長谷川秀治(群馬大学)・松沢勲(名古屋大学)・山田秀雄(一橋大学)

◎印は会長

監事 福永英二(アフリカ協会)

幹事 浦野起央(日本大学)・鈴木秀夫(東京大学)・藤田弘二(アジア経済研究所)

日本アフリカ学会の研究機関誌『アフリカ研究』編集委員は、浦野起央・小堀巖・富川盛道・長島信弘・中村弘光・西野照太郎・矢内原勝・山田秀雄の8名であった。

発起人代表の一人であった小堀巖は回想「日本アフリカ学会の歩み」(『民族学研究』第33巻第2号、1968年9月)において、「アフリカ学会創立大会の案内が、1964年3月15日、アフリカ学会準備会発起人代表の次の8名の名前によりひろく関係者に配布された」と回顧している。配布された文書(オリジナルは縦書き)(創立年度からの会員であった梅棹忠夫の手元にあつた資料。現在は国立民族学博物館梅棹資料室所蔵)は次のとおりである。また、この文書は『アフリカ研究』創立20周年記念特別号(1983年)にも再録されている。

アフリカ学会創立大会御案内

アフリカに関する正しい認識が今日の日本にとって重要なことはいうまでもありません。これまで日本では個人なり大学研究機関単位のアフリカ研究はようやく活潑になつており、一方、現地における各界の活動も盛んになつておりますが、その相互間の連絡調整や協力はまだ行なわれておりません。この現状に鑑み、日本における研究の連絡と協力をはかり、国際的な情報交換と研究交流の窓口として、私たちはここに「アフリカ学会」を創立しようとするものであります。

つきましてはアフリカ学会創立大会(第一回大会)を左記の通り開催致しますので、御出席下さいますよう御案内申し上げます。

一九六四年三月十五日

アフリカ学会準備会発起人代表

(五十音順)

今 西 錦 司

岡 正 雄

小 堀 巖

中 山 正 善

西 野 照太郎

長谷川 秀 治

福 永 英 二

松 沢 勲

案内文は発起人代表の表記の後、「記」として、記念講演会、第一回大会、懇親会の案内を紹介している。末尾に記されている学会事務所の宛先は「東京大学理学部地理学教室気付アフリカ学会準備会」である。案内文が入っていた封筒には入会申込書(これも国立民族学博物館梅棹資料室に所蔵されている)も同封されていたようで、その郵送先は事務所になっている。ちなみに、年会費は1500円であった。

日本アフリカ学会創立大会は東京大学で実施され、4月11日には午後1時30分から4時まで公開の記念講演会が、4月12日には午前10時から午後5時まで『『アフリカ』とは何か』を主題とする第1回大会が、いずれも理学部2号館4階講堂で開催されている【資料3】。大会終了後には懇親会も開催された。プログラムは以下のごとくである。

記念講演会(公開)

青ナイル——エチオピア・スーダンの自然
地中海とサハラ

諏訪兼位(名古屋大学)
小堀 巖(東京大学)

第1回大会 主題「アフリカとは何か」

報告 I

座長：矢沢大二(都立大学)

アフリカの自然環境の特質

鈴木秀夫(東京大学)

座長：泉靖一(東京大学)

アフリカの伝統的社会構造と文化

長島信弘(国際キリスト教大学)

高橋統一(東洋大学)

報告 II

座長：山田秀雄(一橋大学)

アフリカの経済構造の特質

岩城 剛(愛知学院大学)

座長：西野照太郎(国立国会図書館)

アフリカの政治体制の特質

浦野起央(日本大学)

シンポジウム

司会：泉靖一

このように日本アフリカ学会第一回大会は1964年4月11、12日に東京大学で開催された。当時、年次研究大会は「学術大会」ではなく単に「大会」と呼ばれていた。小堀巖は「アフリカ学会の誕生」(『朝日新聞』1964年4月10日)【資料2】において、この大会が創立大会である、と記述している。また小堀巖は「アフリカ学会の十年」(『朝日新聞』1973年6月12日)において、(日本アフリカ学会は)「1964年4月、東大で発会式をあげ」た、と指摘している。浦野起央は、『月刊アフリカ』に寄稿した報告【資料3】のなかで「4月11日の発起人会で具体的な討議が重ねられ、翌12日の大会で会員の賛同をえて正式に発足するに至った」と述べている。これによると、4月11日の記念講演会の前か後に発起人会が開催され、そこで議論を踏まえて、翌12日に学会が正式に発足したことになる。

なお、創立大会における講演と報告のほとんどは、活字になっている。小堀巖の講演「地中海とサハラ」は『月刊アフリカ』1964年7月号に掲載され、諏訪兼位は同誌に1964年6月号から講演「青ナイル」の内容に基づく連載を始めている。鈴木秀夫、長島信弘、高橋統一、浦野起央の報告は、『アフリカ研究』第1号(1964年12月)に掲載された。

さて、アフリカ学会準備会発起人は43名であった。この43名の名簿は未見である。日本アフリカ学会の創立大会開催時の会員数については約200人といわれている。長谷川秀治初代会長は「今日現在登録済み約160名、未登録を含めると約200名の方々が入会され」(長谷川秀治「日本アフリカ学会の発足にあたって」『アフリカ学会会報』第1号、1964年5月1日)【資料1】と記録している。また、同『会報』の4頁には、「4月末の会員数は153名」と記されている。浦野起央は「発足時の会員というのは200名いた。しかし、これは研究者というのは3分の2前後」(『アフリカ研究』特別号、「日本アフリカ学会創

立20周年記念座談会」における発言、1983年5月)と解説した。

創立大会の初日と2日目の出席者の人数と名前に関する資料は、残念ながら見つかることができていない。創立大会の記録写真も同様に未見である。前掲の長谷川会長による会報第1号の記事には「会員懇親会には、約50数名の参会」をみたと書かれている。前掲「20周年記念座談会」における諏訪の発言によれば、記念講演会には「ずいぶん沢山の人々が来ました」とのことなので、講演会の聴衆は会員懇親会の参加者よりは多数であったと考えられる。

日本アフリカ学会は創立直後から研究会(例会)を開催しており、『アフリカ研究』の「学会記事」に記録がある。以下に第10回までの演者と演題を記載する。

第1回例会(1964年5月23日)長谷川秀治「熱帯医学上よりみたアフリカ」国立国会図書館小講堂。

第2回例会(1964年6月27日)矢内原勝「北アフリカ経済の問題点」国立国会図書館小講堂。

第3回例会(1964年10月22日)岡正雄、高橋統一「ソビエトにおけるアフリカ研究の動向」
東京大学山上会議所。

第4回例会(1964年11月20日)小堀巖「独立後のアルジェリア・サハラ」アジア経済研究所。

第5回例会(1964年12月12日)富川盛道「東アフリカの遊牧民社会について」アジア経済研究所。

第6回例会(1965年1月27日)新島迪夫「ナイジェリアの1カ年」、小宮義孝「第一回アジア・ア
フリカ医学会議に出席して」アジア経済研究所。

第7回例会(1965年2月26日)細見真也「ガーナの農業」アジア経済研究所。

第8回例会(1965年3月19日)藤田弘二「東アフリカのアジア人」アジア経済研究所。

第9回例会(1965年5月7日)西江雅之「東アフリカの言語について」アジア経済研究所。

第10回例会(1965年6月14日)川田順造「西アフリカの旅から」アジア経済研究所。

第2回大会は名古屋大学(1965年5月29、30日)、第3回大会は天理大学(1966年5月21、22日)で開催された。1964年12月には学会誌創刊号である『アフリカ研究』第1号が刊行された【資料4】。第1号には、4件の「報告」(論文)と2件の「資料」、および3件の書評が掲載されている。4件の報告はいずれも第1回大会における発表を原稿にしたものだった。著者は鈴木秀夫、長島信弘、高橋統一、浦野起央である。資料の執筆者は、西野照太郎と小堀巖であった。こうして、日本アフリカ学会はその体制を整えていくことになる。

なお細事ではあるが、学会の名称に関する問題がある。1964年3月15日付の文書「アフリカ学会創立大会御案内」には「日本」の文字がない。小堀巖の記事「アフリカ学会の誕生」も「アフリカ学会」の創立大会と記している。その後、学会の正式名称は「アフリカ学会」から「日本アフリカ学会」となった。長谷川秀治「日本アフリカ学会の発足にあたって」を収録しているのは『アフリカ学会会報』(第1号、1964年5月1日)であるが、編集者は「日本アフリカ学会」である。第2号(1964年7月20日)の会報のタイトルは『日本アフリカ学会会報』となっているが、第3号(1964年10月20日)では、ふたたび『アフリカ学会会報』に戻っている。ただし、会報の編集者は一貫して「日本アフリカ学会」と記載されている。

また、日本アフリカ学会の英語名称は、当初“Japanese Association of Africanists”であった。現在の“Japan Association for African Studies”への改称が決定されたのは、1974年6月29日の理事会においてであった。

2 日本アフリカ学会の会員

創立された年(1964年)の10月に発行された日本アフリカ学会『日本アフリカ学会会員名簿 昭和39年10月現在』(国立民族学博物館梅棹資料室所蔵)がある。学会が刊行した最初の会員名簿であると考えられる。これによれば、日本アフリカ学会の創立年度の会員は個人会員が218人、団体会員が6団体であった。掲載されている全会員を以下に記す。なお名簿には住所と専攻が紹介されているが、これは省略する。また人名や大学・研究機関の名称の表記は、明白な誤記は訂正したものの、基本的には名簿における表記のママとするが、株式会社を意味するK.K.は(株)とした。

阿江伸二	アラブ連合友好協会	大来佐武郎	日本経済研究センター
青木信治	大蔵省	大嶋忠雄	日本ガーナ協会
青柳清孝	拓大海外事情研究所	大竹俊紀	愛知学芸大(学生)
青山道夫	九大法学部	大畑篤四郎	早大法学部
秋山弘志	大正海上火災保険(株)	大脇武夫	天理図書館
安倉恒彦	八王子高校	大脇保彦	同志社高校
畔上昭雄	関屋中学校	大和田政輔	外務省
有川徹		岡正雄	アジア・アフリカ言語文化研究所
安藤勝美	アジア経済研究所	岡部清	都立大
アフリカ協会(社団法人)		奥野保男	朝日新聞外報部
石沢良昭	アジア・アフリカ図書館	奥村民夫	拓大海外事情研究所
板垣雄三	東大東洋文化研究所	織田武雄	京大文学部
一又正雄		小田英郎	慶大法学部
泉靖一	東洋文化研究所	鬼丸豊隆	住友商事
伊藤新一	早大(学生)	小幡操	東工大・法政大
井上兼行	東大文化人類学研究室	小川正恭	都立大
今井浩之	三井精機工業(株)	大山彦一	鹿児島大
今西錦司	京大人文科学研究所	加賀谷寛	大阪外語大
今橋光明	日立製作所	影石稔	放出中学校
入江敏夫	東経大	風間実良	明大(学生)
岩田慶治	大阪市大文学部	片平秀雄	東京農大(学生)
岩城剛	愛知学院大商学部	唐弓慶太郎	日立製作所
井上寛	東京農大	河合雅雄	日本モンキーセンター
生沼曹喜	国際技術協力協会	川上俊次	東洋綿花(株)
浮谷二郎		川端利彦	大阪赤十字病院
上杉聡彦		川田順造	パリ大
内田勝敏	大阪市大経済学部	川崎晴朗	ボストン大
内田繁隆	国士館大政経学部	河部利夫	東京外語大
浦野起央	日大法学部	菅野亮子	アフリカ協会
梅津和郎	大阪外語大	木内信胤	世界経済調査会

菊地義剛	日立女子高校	菅野忠	
北岡豊治	昭和同人会	杉浦はるみ	西宮中学校
北村裕弥	国際建設技術協会	杉山洋	信盛堂印刷
木村勉	日本機械計装(株)	鈴木修次	日本ダム協会
京都大学アフリカ研究会	京都大学人文科学研究所	鈴木秀夫	東大理学部
		鈴木博	NHK 報道局
釘宮道生		須藤英雄	東大理学部
栗本弘	日本エカフェ協会	砂子喜実	大東京木材荷扱所(株)
黒部美江子	東大教養学部(学生)	諏訪兼位	名古屋大理学部
合田栄作	香川大学芸学部	住友商事東京支社	
小島正之	天理大	関根英一	アジア経済研究所
小関藤一郎	関西学院大社会学部	高木正朝	日本空手協会
五島忠久	阪大教養学部	高木隆郎	京大医学部付属病院
小林孝一	横浜市大	高田誠	教育大
小林知生	南山大	高田芳春	日本水産(株)
小林正次	慶大工学部	高橋統一	東洋大社会学部
小堀巖	東大理学部	高橋正雄	九大経済学部
小松三郎	堺高校	高山賢一	新藤美術印刷(株)
小宮義孝	国立予防衛生研究所	高山直子	国学院大(学生)
近藤常夫	明正高校	竹井かつ子	国学院大(学生)
近藤正義	東小学校	田代茂樹	東洋レーヨン(株)
斉藤正次	通産省	館岡亜緒	国立科学博物館
酒井栄吾	愛知学芸大	田中直吉	法政大
酒井正二	酒伊繊維工業(株)	田中庸雄	大阪外語大
坂本峻雄	住友商事(株)	谷川栄彦	九大法学部
崎山理	京大	谷口穰	京大文学部(学生)
佐々木高明	立命館大文学部	谷本圭介	島根大文学部
佐々木宏人	早大(学生)	高橋功	シュヴァイツァー病院
佐藤恵子	立大経済学部(学生)	田中欣治	
佐藤孝治	日大理学部(学生)	辻直四郎	日本学士院
佐藤惣一	茨城県教育庁	辻村繁道	滝高校
佐藤昌章	日本鉄鋼連盟	帝人(株)	
桜井良平	日本外語出版社	天理図書館	
直原利夫	天理大	戸川幸夫	
穴戸寛	共同通信外信部	富川盛道	アジア・アフリカ言語文化研究所
科野孝蔵	科学産業(株)	富田浩造	北大
申国柱	東洋学術研究所	内藤智秀	聖心女子大
新村猛	名大文学部	永田逸三郎	三井物産(株)
末永典子	都立大(学生)	長島信弘	国際キリスト教大
菅家啓一	東海大海洋学部(学生)	中邑豊朗	中東調査会

中谷武世	日本アラブ協会	細見真也	アジア経済研究所
中村弘光	アジア経済研究所	細野軍治	青山学院大
中村孝志	天理大	堀新一	愛知学院大商学部
中村和郎	都立大理学部	堀場伸世	日本映画新社
中山正善	天理大	前田稔	阪神電気鉄道(株)
永尾正章	日本貿易振興会	松浦晃一郎	外務省
浪貝毅	京大文学部(学生)	松尾英輔	九大農学部
中村満次郎	天理大	松沢勲	名大理学部
西江雅之	NHK国際局	松下兼和	福山病院
西川五郎	教育大農学部	松本信広	慶大文学部
西川登	豊田通商(株)	松本智	マツモト貿易
西野照太郎	国立国会図書館	丸本康子	京大文学部
西村嘉助	東北大理学部	三崎屋謙介	新興貿易(株)
新島迪夫	東京医科歯科大	水野瑞夫	岐阜薬科大
日本北アフリカ協会		三井公彦	日大法学部大学院(学生)
野上素一	京大文学部	宮治一雄	東大大学院(学生)
野口正一	国際自動車交通文化研究所	宮田民雄	NHK国際局
野田福生	東京学芸大	水野辰司	東京農大育種学研究所
端信行	京大文学部	武者小路安子	
橋本襄爾	平凡社(株)	村上節太郎	愛媛大文学部
長谷川秀治	群馬大	村武精一	都立大人文学部
服部四郎	東大文学部	望月通	一橋大(大学院学生)
英修道	慶大法学部	森田昭広	日本IBM(株)
原口武彦	アジア経済研究所	森田善二郎	三菱経済研究所
林馨	長崎医大風土病研究所	森本肇	日本国際連合協会
原島茂	早大(学生)	矢内原勝	慶大経済学部
林晃史	アジア経済研究所	山田憲太郎	名古屋学院大経済学部
日野舜也	北大文学部	山田秀雄	一橋大経済研究所
二名良日	早大(学生)	山本信一	山梨県経済部
深谷善一	天理教海外伝道部	山本達郎	東大文学部
深津晴男	ソニー(株)	山本登	慶大経済学部
深町宏樹	東京外語大(学生)	山本益次	外務省
深沢八郎	アジア経済研究所	山本玲子	
福永英二	アフリカ協会	山口昌男	イバダン大学
藤田弘二	アジア経済研究所	矢沢大二	都立大
藤原昭夫	巣鴨高校	八幡一郎	教育大
藤本亮太	大正海上火災保険(株)	柳誠四郎	同志社大学経済学部(学生)
古山美枝子		由比浜省吾	岡山大法文学部
法貴三郎	明大	米山俊直	京大農学部
星昭	アジア経済研究所	吉田昌夫	アジア経済研究所

和田正平 北大農学部
渡辺武男 東大理学部
渡辺孝雄 木下産商(株)

渡辺正臣 東京写真
渡部光子 日本読書新聞

前述のように4月末の会員数は153名であった。学会創立からわずか6か月後に、団体会員を含めて会員が220を超えていることに驚かされる。当時の学界の長老を含め、実に多彩な人々が創立年度の会員となった。多様な人々のなかで、研究者のグループが形成されていた。資料(名簿)がある研究者グループの研究会は「アフリカ研究会」、「名古屋大学アフリカ調査研究会」そして「京都大学アフリカ研究会」であった。1964年10月の『日本アフリカ学会会員名簿』に記載された個人会員218人のうち、アフリカ研究会所属が42人、名古屋大学アフリカ調査研究会所属が6人、京都大学アフリカ研究会所属が9人であった。3つの研究会の会員は日本アフリカ学会の創立に貢献し、日本アフリカ学会の会員の約4分の1を構成した。他方、これらの研究会には所属しない多くの研究者と非研究者が会員になった。民間企業所属の個人会員が約30人いた。ジャーナリストや外務省職員も含まれている。また、学生の会員が約20人いた。当時、東京外国語大学、早稲田大学、明治大学、東海大学などには学生のアフリカ研究会があった。

なお、1964年度会計決算書類(国立民族学博物館梅棹資料室所蔵、「小堀」の捺印がある)によると、会費を納入した正会員は164名、法人会費は4口であった。

創立大会前後(1962～1965年)に関する諸資料から、3つの研究会の会員と所属を以下において紹介する。

3 「アフリカ研究会」の会員

東京では1963年から「アフリカ研究会」が活動していた。日本アフリカ学会の創立前に活動し、創立を準備した研究者のグループとして、「アフリカ研究会」(英名: The Association of African Studies)は重要である。日本アフリカ学会『会報』第2号の記事によると、設立は1963年7月である。第1回のアフリカ研究会は1963年8月13日に開催されている。アフリカ研究会は研究機関誌『アフリカ研究』(The Journal of African Studies)を2回(第1巻第1号=1963年12月、第1巻第2号=1964年3月)刊行した。つまり、日本アフリカ学会の機関誌である『アフリカ研究』の刊行以前に、別の雑誌『アフリカ研究』が存在したのである。奥付けによると、事務局はアフリカ協会内に置かれている。編集委員は、岩城剛、浦野起央、小堀巖、長島信弘、西野照太郎(編集委員長)、福永英二、藤田弘二、矢内原勝の8名であった。

『アフリカ研究』の寄稿者は西野照太郎、加賀谷寛、山口昌男、中村弘光、浦野起央、藤田弘二(以上、第1号)、内田勝敏、西野照太郎、山口昌男、阿部年晴、浦野起央(以上、第2号)であった。

「アフリカ研究会代表」西野照太郎は、『アフリカ研究』第1巻第1号巻頭の「創刊のことば」(1963年11月)【資料5】において、日本におけるアフリカ研究の高揚を強調し、「アフリカ研究会」と機関誌創刊の意義について、「この「アフリカ研究会」を来春には、正式に、日本の「アフリカ学会」The Association of African Studiesに発展させ、この雑誌はその機関誌The Journal of African Studiesにしたい、というのが私たちの心構えである」と宣言している。西野照太郎らにとって、アフリカ研究会はアフリカ学会を準

備する前身研究会であった。日本アフリカ学会『会報』第2号の「例会だより」では「アフリカ研究会」の例会が紹介されているが、「学会の母胎となったアフリカ研究会の例会」という文言がある。これは、『会報』の編集者であり、「アフリカ研究会」のメンバーでもあった長島信弘の文章であると思われる。また、同『会報』には、「アフリカ研究会」の『アフリカ研究』は、「学会成立により、学会の機関誌として発展的に解消」という記述もみえる。たしかに、日本アフリカ学会『アフリカ研究』の英文目次のスタイルは、アフリカ研究会『アフリカ研究』のそれにそっくりである。前者が後者をそのまま引き継いだものと考えられる。また、アフリカ研究会『アフリカ研究』の編集委員8名のうち5名(浦野、小堀、長島、西野、矢内原)が、日本アフリカ学会『アフリカ研究』の編集委員となっている。

『アフリカ研究』(第1巻第2号、1964年3月15日)の末尾に掲載された記事「アフリカ学会の創立大会について」は「アフリカ学会創立大会御案内」を紹介した。

アフリカ研究会は1963年8月から1964年2月まで6回の研究会を開催した。会場はいずれも虎ノ門のサカエであった(『会報』第3号)。アフリカ研究会『アフリカ研究』第1号と第2号の「アフリカ研究会 日誌」には第1回から第6回の研究会の参加者数も記載されているが、それによると20名から30名のあいだであった。

第1回アフリカ研究会(1963年8月13日)西野照太郎「日本におけるアフリカ研究の系譜と現状」。

第2回アフリカ研究会(1963年9月17日)藤田弘二「第1回アフリカニスト会議」。

第3回アフリカ研究会(1963年10月29日)長島信弘「文化人類学におけるアフリカ研究史」。

第4回アフリカ研究会(1963年11月14日)中村弘光「現代ナイジェリアの政治研究」。

第5回アフリカ研究会(1963年12月18日)岩城剛「東アフリカの経済統合」。

第6回アフリカ研究会(1964年2月11日)原口武彦「ロバートのフランス植民経済史について」。

アフリカ研究会「アフリカ研究会 参加者名簿」がアフリカ研究会『アフリカ研究』(第1号、1963年12月)に掲載されている。これには個人会員67人、団体会員1団体が記載されている。名簿は順序不同で、研究会の中心となった人が作成したものと考えられる。『アフリカ研究』の編集に関与した浦野起央の回想によれば、「アフリカ研究会が63年(8月)に始まって、学会ができるまでの間に、つまり64年の2月までに6回開かれている」「アジ研の研究会よりもっと広い形でのアフリカ研究会という形で、東京で始まった」(浦野起央、同)と紹介された。アフリカ研究会の代表は西野照太郎であり、研究会の中心会員は編集委員となった西野照太郎、小堀巖、矢内原勝、藤田弘二、福永英二、浦野起央、岩城剛、長島信弘らであった。名簿において、この8人が最初に紹介されている。首都圏の大学の研究者が中心であったが、東京以外の大学の研究者も参加していた。

以下の紹介において、下線を付した氏名は1964年10月の『日本アフリカ学会会員名簿』に記載されていることを意味する。点線の下線を付した氏名は、1964年の名簿には記載されていないが、1965年4月の名簿には記載されている者である。個人会員67人中、42人が創立年度の日本アフリカ学会会員となった。氏名の後の所属は「アフリカ研究会 参加者名簿」での記載事項である。名簿には住所と専攻が紹介されているが、これは省略する。2行目以降は補足説明である。「アフリカ研究会」と、1964年度と1965年度に日本アフリカ学会および学会誌で果たした役割について記載した。

- 西野照太郎 国会図書館
日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、報告(63)、論文(63, 64)、大会座長(64.4)、資料(64)、文献目録(65)、理事(64, 65)、編集(64, 65)、評議員(65)。
- 小堀巖 東京大学理学部
日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、大会講演(64.4)、報告(64)、資料(64)、論文(65)、理事(64, 65)、編集(64)。
- 矢内原勝 慶応大学経済学部
報告(64)、編集(64, 65)、幹事(65)、評議員(65)。
- 藤田弘二 アジア経済研究所
報告(63, 64)、論文(63)、書評(64)、幹事(64, 65)。
- 福永英二 アフリカ協会
日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、監事(64, 65)、評議員(65)。
- 浦野起央 小田原女子短大
論文(63, 64)、大会報告(64.4)、報告(64)、資料(65)、幹事(64, 65)、編集(64, 65)。
- 岩城剛 早稲田大学
報告(63)、大会報告(64.4)、書評(64)、報告(65)。
- 長島信弘 国際キリスト教大学
報告(63)、大会報告(64.4)、報告(64)、編集(64)。
- 森田善次郎 三菱経済研究所
- 泉靖一 東京大学
大会座長(64.4)。
- 山田秀雄 一橋大学
大会座長(64.4)、理事(64, 65)、編集(64)、評議員(65)。
- 中村弘光 アジア経済研究所
報告(63)、論文(63)、書評(64)、論文(65)、幹事(64, 65)、評議員(65)、編集(64, 65)。
- 吉田昌夫 アジア経済研究所
- 細見真也 アジア経済研究所
報告(65)。
- 安藤勝美 アジア経済研究所
- 原口武彦 アジア経済研究所
報告(63)。
- 星昭 アジア経済研究所
報告(65)。
- 林晃史 アジア経済研究所
- 関根英一 アジア経済研究所
- 入江敏夫 東京経済大学
- 上杉聰彦
末続吉間 三井物産
- 板垣雄三 東大東洋文化研究所
- 川田順造 ソルボンヌ大学
報告(65)、幹事(65)。
- 穴戸寛 共同通信外信部
- 勝岡宣 共同通信外信部
- 奥野保男 朝日新聞外信部
- 山下秀雄 共同通信外信部
- 佐藤昌章 東京大学国際関係論
幹事(65)。
- 宮治一雄 東京大学国際関係論
- 山口昌男 国際キリスト教大学
論文(63, 64)、報告(65)、幹事(65)。
- 小田英郎 慶応大学法学部
- 阿部年晴 東京大学文化人類学
論文(64)、書評(65)。
- 高橋統一 東洋大学
大会報告(64.4)、報告(64)、幹事(65)、評議員(65)。
- 大森元吉 都立大学
報告(65)。
- 西江雅之 早稲田大学
報告(65)。
- 鈴木二郎 都立大学人文学部
- 鈴木秀夫 東京大学理学部
大会報告(64.4)、報告(64)、幹事(64)。
- 仙名紀 週刊朝日編集部
- 村武精一 都立大学
- 鈴木満男 順天堂大学
- 佐藤芳之 アフリカ協会

那須国男	アフリカ協会	青木信治	大蔵省
松井秀三	共同通信外信部	松本爾	平凡社編集4課
荒木邦彦	日本レーヨン	菅野亮子	アフリカ協会
山口孝一郎	外務省経済局	黒部美江子	東京大学文化人類学
加藤利一	外務省経済局	神谷美保子	東京大学文化人類学
岩本良太郎	外務省経済局	谷本圭介	島根大学
大和田政輔	外務省経済局	柳沢英二郎	愛知大学
松浦晃一郎	外務省経済局	梅津和郎	大阪外国語大学
渡辺通弘	外務省経済局		報告(65)。
北香恵一	外務省経済局	加賀谷寛	大阪外国語大学
本多英一	外務省経済局		論文(63)。
山本学	外務省経済局	上野秀夫	近畿大学
藍野祐嗣	日産ディーゼル	大脇岳夫	天理大学
高井光	アフマディア・コミュニティ		東京外国語大学アフリカ総合調査会

4 「名古屋大学アフリカ調査研究会」の会員

名古屋では「名古屋大学アフリカ調査研究会」が活動していた。名古屋大学は、1962年にアフリカ調査隊をジブチ(当時は仏領ソマリランド)、エチオピア、スーダンおよびエジプトに派遣した。隊員であった諏訪兼位によると、「この調査の後、1963年早春に名古屋大学アフリカ調査研究会(会長=松澤勲名古屋大学教授)が発足した」(『大陸アフリカ——名大の研究軌跡』『名古屋大学博物館報告』2009年、諏訪兼位『裂ける大地 アフリカ大地溝帯の謎』1997年)。名古屋大学アフリカ調査研究会が発足したのは、1963年4月のことであった。同年に2回の研究会を開催している(アフリカ研究会『アフリカ研究』第1号)。第3回の詳細は不明だが、第4回研究会については、『会報』第2号に掲載されている。

第1回研究会(1963年6月22日)諏訪兼位「エチオピア高原について」、長沢元夫「サバンナについて」、および「アフリカに関する各種研究団体と資料の紹介」、名古屋大学学生会館第2会議室、参加者22名。

第2回研究会(1963年9月28日)水野瑞夫「アフリカのアロエについて」、小林知生「アフリカ先史学と東アフリカ」、名古屋大学学生会館第1会議室、参加者19名。

第4回研究会(1964年5月23日)浅井恵倫「アフリカ研究におけるヨーロッパ各国の動向」、江上波夫「アフリカおよび近東の旅行談」名古屋大学。

「名古屋大学アフリカ調査研究会 会員名簿」はアフリカ研究会『アフリカ研究』(第1号、1963年12月)に掲載されている。個人会員43人の氏名と所属・職が記載されている。名簿は50音順である。名簿作成時(1963年10月10日)の役員は、会長が松沢勲、顧問が勝沼精蔵・松坂佐一・篠原卯吉、委員が有山兼孝・新村猛など7人、幹事が諏訪兼位・長沢元夫・堀川侃であった。諏訪兼位の回想によれば「名古屋大学アフリカ調査研究会というのが間もなくできました。43名でした。1963年の6月から第1回の研究会を始めまして、毎回20名ぐらい集まって、かなり熱心にアフリカのことを勉強しはじめました」(『ア

フリカ研究』特別号、「日本フリカ学会創立20周年記念座談会」における発言、1983年5月)と紹介された。名古屋大学の研究者が中心であった。諏訪によると、研究会に関係した研究者(教員と院生)は約70人であった。

会員には名古屋大学の総長、元総長、部局長が名を連ね、名古屋大学以外の名古屋市内および周辺地域の大学の教員も含まれており、「オール名古屋」的な構成になっている。

以下の紹介において、各人の1行目が「名古屋大学フリカ調査研究会 会員名簿」での記載事項である。名簿には住所と専攻が紹介されているが、これは省略する。2行目以降は、名古屋大学フリカ調査研究会と日本フリカ学会で果たした役割に関する補足説明である。下線を付した6人が創立年度の日本フリカ学会会員となった。点線の下線を付した氏名は、1965年度に会員となった者である。

安達厚三	名大・文・史学科 研究生	白木敬一	名大・理・地球 大学院
有山兼孝	名大・理・物理 教授	<u>諏訪兼位</u>	名大・理・地球 教官
石岡孝吉	名大・理・地球科学 教官		報告(63)、大会講演(64.4)、幹事(65)、
井関弘太郎	名大・文・史学 教官		報告(63, 65)、評議員(65)。
伊藤賀祐	岐阜医大 教授	杉浦孜	名大・理・地球 大学院
岩田金治郎	名大・医・外科 教官	鈴木重人	愛知学芸大 教官
植村武	名大・理・地球科学 教官	澄田正一	名大・文・史学 教授
	報告(65)。	高橋昭	名大・医・内科 研究員
内田富次	名大・医・解剖 大学院	手嶋竹司	名古屋・西高校 教諭
浦野隼臣	名大・理・地球科学 大学院	<u>長沢元夫</u>	名城大・薬学 教官
岡田博	名大・医 教授		報告(63)、評議員(65)。
大参義一	愛知学院 教諭	原田市太郎	名大・理・生物 教官
加藤三郎	名古屋市鶴舞図書館 司書	早川正一	南山大 大学院
嘉藤良次郎	名大・教養 教官	<u>堀川侃</u>	名大・教養 教官
勝沼精蔵	名大 名誉教授		評議員(65)。
木戸哲夫	名古屋・女学院高校 教諭	松井武敏	名大・文 教授
喜多村俊夫	名大・文 教授	松坂佐一	名大 名誉教授
鬼頭純三	名大・医・解剖 教官	<u>松沢勲</u>	名大・理・地球 教授
黒田直	名大・理・地球 大学院		日本フリカ学会発起人代表(64.3)、
桑原徹	名大・理・地球 教官		理事(64, 65)、評議員(65)。
<u>小林知生</u>	南山大学・文 教授	宮川邦彦	名大・理・地球 教官
	報告(63, 65)、評議員(65)。	水谷伸治郎	名大・理・地球 教官
佐藤忠雄	名大・理・生物 教授	<u>水野瑞夫</u>	岐阜薬大・生薬 教官
<u>酒井栄吾</u>	愛知学(芸)大 教授		報告(63)。
篠原卯吉	名大 総長	吉岡郁夫	名大・医・解剖 大学院
<u>新村猛</u>	名大・文 教授	吉田新二	愛知学芸大 教官
	評議員(65)。		

5 「京都大学アフリカ研究会」の会員

京都では、1962年末から「京都大学アフリカ研究会」が活動していた。今西錦司らは1958年2月にアフリカ類人猿調査を始めた。この調査は、1961年4月以降(～1967年)、「京都大学アフリカ類人猿学術調査隊」(KUAPE)へと、さらに1963年以降は「京都大学アフリカ学術調査隊」(KUASE)へと発展した。この動きと並行して、京都のアフリカ研究者グループの研究会として、今西錦司を会長とした「京都大学アフリカ研究会」(KUARA)が、1962年12月に結成されている。端信行によれば、KUARAは「学術調査のいつばうで研究内容を単なるアカデミズムに終わらせることなく、アフリカについてひろく啓蒙運動をはじめとして、とりあえず学内でアフリカの理解者やアフリカへ行こうという学生を増やそうという目的で結成されたのだった」。また、KUAPEの派遣とKUARAの派遣とが合体してKUASEが派遣されたと述べている(端信行『京都大学アフリカ研究の礎』『人類学の誘惑——京都大学人文科学研究所社会人類学部門の50年』2010年)。

ここに「KUARA会員名簿 1962・12・4(ABC順)」(国立民族学博物館梅棹資料室所蔵)というガリ版印刷B4版1枚の資料がある。17名の会員名簿の下に、「12月4日以降の追加」として4名の名前が記載されている。追加されたのは当時KUAPEのメンバーとしてタンガニーカで調査に従事していた人たちである。また、この名簿の下部左には「緊急のお知らせ」として、1962年12月10日に人文科学研究所(人文研)分館の小会議室で開催される初総会の告知が掲載されている。その右には、「KUARA準備委員一同」を代表して「委員長上山春平」名の12月7日付けの記事があり、「KUARA—京都大学アフリカ研究会は12月3日の創立・発起人コンパによって、滞りなく発足の運びとなりました」と記されている。これによって、KUARAは1962年12月3日に創立されたことがわかる。

KUARA発足を記念して、京都大学では12月4日から1週間にわたって公開アフリカ講座が行われた。講師は今西錦司、和崎宣宏(洋一)、伊谷純一郎、佐々木高明、岩田慶治、中尾佐助、高木隆郎の7名であった。また、翌1963年はじめにはシンポジウムも開催された。この公開講座とシンポジウムの内容をもとに編集されたのが、今西錦司編『アフリカ大陸』(筑摩書房、1963年)である(米山俊直「あとがき」同書)。

「KUARA会員名簿」によれば、京都大学アフリカ研究会(KUARA)の会員は以下のとおりである。役員は会長が今西錦司、委員が端信行、谷泰、谷口穰、上山春平、和崎洋一、監事が藤岡喜愛であった。以下の紹介において、各人の1行目が「KUARA会員名簿」での記載事項である。名簿には住所と専攻が紹介されているが、これは省略する。2行目以降は補足説明である。KUASE、KUARAおよび日本アフリカ学会で果たした役割について記載した。氏名の下線を付した9人が創立年度の日本アフリカ学会会員となった。点線を付した3名は、1965年に会員になっている者である。

藤岡喜愛	京大・人文研分館	KUAPE	KUASE(63—65)、講演(62)、プリマール研究会報告(65)
		KUASE(64)、シンポジウム(63)、日本民族学会報告(65)	
葉山杉夫	京大・理・動物		
端信行	京大・文(2)・探検部		
		KUASE(63)、シンポジウム(63)	
伊谷純一郎	京大・理・動物	KUAPE	
			今西錦司 京大・人文研・理 KUAPE
			日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、理事(64, 65)、京都大学アフリカ研究会創設(62)、KUASE(63—65)、講演(62)、日本生態学会報告(61)、日本ア

フリカ学会報告(65)。
池田次郎 京大・理・動物
岩田慶治 大阪市大・文
講演(62)。
片寄俊秀 大阪府庁・企画 KUAPE
KUAPE(61-62)、シンポジウム(63)。
中尾佐助 大阪府大・理
講演(62)。
佐々木高明 立命館大・文・地理
講演(62)
谷泰 京大・人文研分館
シンポジウム(63)。
谷口穰 京大・文(2)・探検部
KUAPE(63)。
高木隆郎 京大・医・精神病 KUAPE
KUAPE(64)、講演(62)、日本精神神経
学会報告(65)。
上山春平 京大・人文研
シンポジウム(63)。
梅棹忠夫 大阪市大・理
評議員(65)、KUAPE(63)、シンポジウム
(63)、日本人類学会報告(64, 65)、日
本民族学会報告(64, 65)、日本アフリ

カ学会報告(65)。
和崎洋一 京大・人文研(嘱)
幹事(65)、講演(62)、KUAPE(63)、日
本民族学会報告(64)、日本人類学会報
告(64)、日本アフリカ学会報告(65)。
米山俊直 京大・農
幹事(65)、シンポジウム(63)。

12月4日以後の追加：

東滋 在アフリカ・キゴマ基地 KUAPE
KUAPE(63)、日本人類学会報告(64)、
プリマーテス研究会報告(65)。
豊嶋顕達 在アフリカ・キゴマ基地 KUAPE
KUAPE(63)、日本人類学会報告(64)、
プリマーテス研究会報告(65)。
富川盛道 在アフリカ・エヤシ基地 KUAPE
編集(64)、幹事(65)、評議員(65)、
KUAPE(63, 65)、日本民族学会報告(64,
65)、日本アフリカ学会報告(65)。
富田浩造 在アフリカ・エヤシ基地 KUAPE
KUAPE(63, 65)、日本学術振興会駐在員
(64)、日本民族学会報告(64, 65)、日
本アフリカ学会報告(65)。

当時、文学部学生として研究会に参加した端信行は、今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究』(西村書店、1968年、Aとする)について、「執筆者のほとんどがKUAPEの会員であり、その意味で、本書の刊行には、KUAPE 6年の歴史も刻まれている」(端信行「京都大学アフリカ研究会について」『アフリカ研究』1969年)、と回想している。梅棹忠夫は「京都大学アフリカ研究会(KUAPE) …… それは、学内・学外の研究者および学生を会員とする自由な研究団体」(梅棹忠夫「アフリカ研究の十年」『アフリカ社会の研究』1968年)と紹介している。

また今西錦司編『アフリカ大陸』(筑摩書房、1963年、Bとする)の「あとがき」(米山俊直)は、京都大学アフリカ研究会の「公開アフリカ講座」講演者とシンポジウム参加者の名前を紹介している。AとBから、京都大学アフリカ研究会の活動に関係した研究者の名前を列挙すれば、以下のとおりである。ここでは「KUAPE会員名簿」の会員も重複して掲載する。

なお「KUAPE会員名簿」には含まれていないが、KUAPEの活動に参加し、1964年に日本アフリカ学会会員になったのは日野舜也・和田正平・林薫であった。河合雅雄も1964年に日本アフリカ学会会員となった。この4人を加えれば、1964年度の日本アフリカ学会会員となった京都グループは13人となる。

- 浅井東一 浪速病院院長(63)A, B
シンポジウム(63)、KUASE(63)。
- 東滋 大阪市立大学理学部博士課程(61)A
- 石毛直道 京都大学文学部修士課程(65)A
日本学術振興会ナイロビ駐在員(65)。
- 伊沢紘生 京大理学部修士課程(63)、同
博士課程(65)A
KUASE(63, 65)、日本人類学会報告
(64)、プリマーテス研究会報告(65)。
- 伊谷純一郎 京大理学部助教授(61)A, B
- 今西錦司 京大人文学部研究所教授(61)、
京大理学部教授(62)A, B
- 岩田慶治 B
- 上山春平 B
- 梅棹忠夫 大阪市立大学理学部助教授(63)
A, B
- 片寄俊秀 京大工学部修士課程(61)A, B
- 加納一男 京大理学部博士課程(65)A
KUASE(65)。
- 河合雅雄 日本モンキーセンター A
日本人類学会報告(61)。
- 河端政一 九州大学理学部助手(65)A
KUASE(65)。
- 川那部浩哉 京大理学部講師(63)A
KUASE(63)。
- 川辺宗視 大阪市立大理学部助手(64)A
KUASE(64)。
- 桐野忠大 東京医科歯科大歯学部教授(63)A
KUASE(63)、日本人類学会報告(65)。
- 桑原武夫 京大人文学部研究所教授(61)A
KUAPE(61—62)、評議員(65)。
- 佐々木高明 立命館大学文学部講師(62)B
- 鈴木晃 京都大学理学部博士課程(64)A
KUASE(64, 65)。
- 高木隆郎 京都大学医学部助手(61)A, B
- 田中荘一 A
- 谷泰 京大人文研助手(60)B
- 谷口穰 京都大学文学部学生(63)A, B
- 土肥昭夫 九州大学理学部学生(65)A
KUASE(65)。
- 富川盛道 北海道大学文学部助手(61)、
東京外国語大学AA研助教授(65)A
- 富田浩造 北海道大学文学部修士課程(61)
東京外国語大学AA研研究員(65)A
- 豊嶋顕達 京大理学部修士課程(61)A
- 中尾佐助 大阪府立大農学部教授(61)B
- 西田利貞 京都大学理学部博士課程(65)A
KUASE(65)。
- 端信行 京都大学文学部学生(63)A, B
- 林薫 長崎大風土病研究所講師(64)A
KUASE(64)。
- 日野舜也 北海道大学文学部研究生(64)A
KUASE(64, 65)。
- 福井勝義 京都大学農学部学生(64)A
KUASE(64, 65)。
- 藤岡喜愛 京大人文研助手(64)A, B
- 米山俊直 京大農学部助手(61)A, B
- 和崎洋一(宣宏) 京大人文研研究員(63)A, B
- 和田正平 北海道大学農学部研究生(64)A
KUASE(64, 65)。

6 発起人代表

発起人代表8人のうち、今西錦司は京都大学アフリカ研究会、小堀巖・西野照太郎・福永英二はアフリカ研究会、松沢勲は名古屋大学アフリカ調査研究会に所属していた。次の3人はいずれの研究会にも所属していなかった。当然のことだが、3人とも学会創立時からの会員であり、学会の要職を歴任している。

岡正雄 明治大学

日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、報告(64)、資料(65)、理事(64, 65)。

中山正善 天理大学

日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、理事(64)、顧問(65)、評議員(65)。

長谷川秀治 群馬大学

日本アフリカ学会発起人代表(64.3)、報告(64)、会長(64, 65)、理事(64, 65)、評議員(64, 65)。

7 アフリカ研究機関

日本アフリカ学会の創立につながった研究者グループの研究会は主として東京のアフリカ研究会、名古屋の名古屋大学アフリカ調査研究会そして京都の京都大学アフリカ研究会であった。しかし、1962年から64年にかけての当時、それ以外にもいくつかのアフリカ研究者(および一般)の団体や機関が活動を展開していた。アフリカ研究会『アフリカ研究』(第1号)の「創刊のことは」(西野照太郎)【資料5】は京都大学、アジア経済研究所、アジア・アフリカ連帯委員会の活動を紹介している。同誌は巻末の「記事」の最後に「以上の研究会活動のほか、以下の研究機関においてもアフリカ研究者の活動が盛んである」として、アフリカ協会(会長=田代茂樹、事務局長=福永英二、1959年設立)、東京大学東洋文化研究所(飯塚浩二)、アジア経済研究所(所長=東畑精一、第6調査室長=藤田弘二)、アジア・アフリカ研究所(所長=岡倉古志郎、1961年設立)、国立国会図書館アジア・アフリカ参考課、天理大学参考館を紹介している。

上記のほか、日本大学国際研究所(所長=百々巳之助)が、1950年代末からアフリカに関する研究報告を刊行している。

アジア経済研究所は、1960年に穴戸寛(共同通信社)を主査としてアフリカ研究委員会を発足させ、藤田弘二など所員はアフリカ研究を進めた。またアジア経済研究所は同時期に泉靖一門下の若手人類学者に委託研究を行っている。二つの研究プロジェクトの成果は、穴戸編『アフリカのナショナリズムの発展(I)』(1962年)、『アフリカのナショナリズムの発展(II)』(1963年)、泉編『ニグロ・アフリカの伝統的社会構造』(1962年)、『ブラック・アフリカの伝統的社会とその変容』(1963年)などとしてアジア経済研究所から刊行されている。アジア経済研究所のアフリカ研究者は、アフリカ研究会では9人が、日本アフリカ学会では10人が会員となった。

東京外国語大学に共同利用の研究機関として「アジア・アフリカ言語文化研究所」が1964年4月に設置され、岡正雄が所長になった。アフリカ言語文化研究部(アフリカ部門)が設置され、富川盛道などアフリカ研究者が所属することになった。

アフリカ学会『アフリカ研究』第8号(1969年)は「研究情報」として、1960年代におけるアフリカ研究機関の活動を紹介した。それらは「京都大学大サハラ学術探検隊調査概要」(石毛直道)、「名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査団の概要」(諏訪兼位)、「アフリカ語の会の研究動向」(和田祐一)、「京都大学人文科学研究所「アフリカ社会の研究」班の動向」(石毛直道)、「天理アフリカ研究会」(和崎洋一)、「京都大学アフリカ研究会について」(端信行)、「アジア経済研究所におけるアフリカ研究活動について」(星昭)、「アジア・アフリカ言語文化研究所のアフリカ学術調査」(日野舜也)などである。また同誌は「学界通信」として、「黒人研究会だより」(貴名美隆・古川博巳)、「日本育種学会における「アフリカの農

産物」に関するシンポジウムについて」(福井勝義)、「最近の土壤肥料学界とアフリカ」(生島靖雄)を紹介している。

日本アフリカ学会が創立されて10年間のアフリカ研究の困難な状況について、小堀巖は次のように回想した(小堀巖「アフリカ学会の十年」『朝日新聞』1973年6月12日)。「このようなアフリカ研究は、現実には、アジア・アフリカ言語文化研究所を除けば、アフリカ研究を主題とする講座が一つもないという日本の大学の現状の上で行われており、個人的な現地調査の資金も今までの研究者は大半が外国の奨学金に頼らざるを得なかったし、いわゆる技術援助ベースでの医学者の現地調査などもきわめて限られた範囲であった。それなりの情報をつめる学会誌の刊行も、年に一、二回ということでは、なかなか専門分野をこえた交流はむずかしかった。しかし、京大グループ、あるいは名大、天理大、アジア経済研究所などのいくつかの核が、いわば身ゼニをきって研究を支えてきたといつてよいだろう」。

おわりに

以上から、日本アフリカ学会創立の経緯と当時の会員に関して、あるいは学会創立前後のアフリカ研究者と研究機関の状況について、十分ではないが、大きな鳥瞰図を描くことができる。

しかし、日本アフリカ学会は、組織としてアーカイブズの整備を怠ってきたため、さまざまな資料は散逸したままになっている。本論の筆者たちが未見の資料も多数あることと思われる。今後も調査を継続し、日本アフリカ学会の創立の経緯と、創立にかかわった諸会員についてより正確な記述ができるように努力をしていきたい。現在、日本アフリカ学会創立50周年記念『アフリカ研究』特集号の編集作業を進めている。会員各位の資料と情報の提供を期待する次第である。

日本アフリカ学会の創立に貢献された先輩諸氏に敬意を表する。

2013年5月25日

附記 本論の執筆にかかわる資料収集にさいして、国立民族学博物館梅棹資料室の三原喜久子さんと明星恭子さんに大変お世話になった。また、一般社団法人アフリカ協会理事の堀内伸介氏(元ケニア大使)と浅野昌宏氏のお世話になった。記して謝意を表したい。

日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会
アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する
プログラム

日時：2013年5月25日午後4時～6時

会場：東京大学駒場キャンパス13号館1323教室

開会挨拶(司会) 栗本英世

アフリカ研究会から日本アフリカ学会へ
——学会創立当時のアフリカ研究を回顧する
..... 浦野起央

名古屋大学アフリカ調査研究会から日本アフリカ学会へ
..... 諏訪兼位

京都大学を拠点としたアフリカ研究のあけぼの
——日本アフリカ学会創立前後のころ
..... 端 信行

日本アフリカ学会創立当時のアフリカ報道
..... 奥野保男

閉会挨拶 川端正久

資料集

資料 1

長谷川秀治「日本アフリカ学会の発足にあたって」(1964)

『アフリカ学会会報』第1号、1964年5月1日。

本稿は、創立20周年『アフリカ研究』特別号(1983年)の「資料集」にも再録されている。

去る4月12日、東京大学に於て第1回大会を催し、無事発会をみた“日本アフリカ学会”の誕生にあたり、これまでの経緯について簡単に報告いたします。

第2次大戦後、アフリカは多くの独立国を生み、国際政治の上においても、もはや無視し得ない存在となり、わが国においてもアフリカの政治、経済、文化、その他各分野に関心を持つ研究者の数が次第にふえて参りました。それらの研究者は、それぞれの所属する大学研究機関を中心とした研究会、或いは個人のグループなど、そのおかれた環境に応じて努力を重ねてきましたが、残念乍ら横の研究連絡をはかる全国的な単一学会はなく、相互に連絡の乏しいままに今日迄参つた次第であります。

去る3月、皆様にお配りした発会の趣意書に名をつらねた8人の発起人代表は、このような現状についてかねがねその打開策を考えて居つた者達であり、何とかしてこの現状を改善し、内に国内の研究者の横の連絡、外に国際学会との連絡をはかる全国的単一学会の設立を考え、全国の志ある研究者に檄を飛ばした次第であります。幸にして多くの方々から激励や賛同を頂き、今日現在登録済み約160名、未登録を含めると約200名の方々が入会され、その地理的分布は北海道から九州におよび、又アフリカを研究する場合の専門分野は、自然科学から人文科学への各分野にまたがっております。

4月11日の記念講演会、4月12日の“アフリカとは何か”と題する研究発表及びシンポジウムは、熱心な参加者に支えられ、特にシンポジウムは、持時間を超過してまで有意義な議論が行われました。又同日夜行われました会員懇親会には、約50数名の参会を見、国内各大学アフリカ研究会の学生諸君も交え、将来に希望をもたせる会合でありました。

本会発足については、当然会則の整備、人事の決定など、会を運営するための事務が残されておつたわけではありますが、これについては次のような手順をふんで参りました。

1. 大会前に発起人代表で協議の上、43名の方々に発起人をお願いしました。
2. 4月8日、国際文化会館に於て、日本学術会議及び関係隣接学会の幹部の方々の御参集を願い、

今後のアフリカ研究のあり方について、種々懇談いたしました。

3. 4月11日、記念講演会終了後、発起人の中から16名の在京世話人が集り、その席上長谷川秀治より、今後の具体的な運営については、発足匆忙の学会のこともあり執行部におまかせしたらどうかの発言あり、参会者の賛同を得ました。
4. 3.の承認に基き、在京世話人は、今西、中山、松沢3発起人とも密接な連絡をとりつつ慎重協議の結果、次の結論を得ました。
5. A. 新設の学会であり、会員相互の面識も乏しく、又会員数も毎日漸増しつつあるような状態では、会員→評議員→理事→会長というような公式な役員人事のルートをとることは、現状では(少くとも今年度は)きわめて難しいが、対外的な折衝もあり、学会としての体裁を整えるために暫定的な役員をおく必要があること。
B. Aのような事情と、事柄の緊急性をかんがみ、明春の第2回大会迄の1年間は、8名の発起人代表がその責任をとり若干の方に応援を願つて暫定的な役員を構成し、出来得れば今年末位、会員数の安定したところで評議員の数を決め、会員の直接選挙により評議員を選出し、正規の手続きを経て次期役員を選出したいこと。

以上のような手順をふみ、世話人協議の結果次のような理事、及び監事の人事を決めました。

本年度の陣容は、今西錦司(京大)、岡正雄(明大)、小堀巖(東大)、中山正善(天理大)、西野照太郎(国会図書館)、長谷川秀治(群馬大)、松沢勲(名大)、山田秀雄(一橋大)の8名であり、互選により会長に長谷川が選ばれました。又学会監事は福永英二(アフリカ協会)氏にお願いし、幹事として浦野起央(日大)、鈴木秀夫(東大)両君を委嘱しました。

役員人事については、右のような事情を会員各位において御了承の上、御承認頂きたく存じます。

新学会の会則については、暫定的に次のように定め、これも次期総会において改善してゆきたいと思えます。

資料 2

小堀巖「アフリカ学会の誕生 調査研究の一里塚に」(1964)

『朝日新聞』(朝刊、東京版)1964年4月10日。

11、12日に大会

十一、十二日、“アフリカ学会”の創立大会が、東京大学で開催される。発起人の一人としてその紹介をかね、アフリカに関心のある研究者にお知らせしたい。

アフリカに対する学術的関心は、今次大戦前は、きわめて少なく、また抽象的であつたといえよう。第二次大戦後、続々とアフリカの政治地図の色わけがわかり、国連も“アフリカの年”を迎えるころになると、アフリカに対する日本人の関心も次第に高まってきた。

学界においても、アジア・アフリカ研究の推進ということが問題になり、日本学術会議はアジア・アフリカ特別委員会をつくり、①経済的なアジア・アフリカ研究に対する科学研究費面での増額による配慮②言語文化を中心とするアジア・アフリカ研究所の設立の問題をとりあげ、アフリカ部門をふくむ後者の研究所は、今春共同利用の研究所として、東京外国語大学内に設置されることになった。

各大学においても、東アフリカに基地を建設して、腰をおちつけた研究体制をもつ京大の今西グループ、名大アフリカ研究会のエチオピア調査、東京農大のアフリカ縦断による農業、生物の調査などその主要なものであり、その他早大、慶大など、経済調査にのりだしてきている。また天理大付属図書館は、アフリカ文献の収集では、国際的にも第一級に近いアフリカ・コレクションを持っている。また東京大学では、機関研究を通して、アフリカに対する各分野からの基礎的アプローチをつづけている。

このようなアフリカ研究の環境の変化にともない、従来各大学、公私の研究調査機関などで、個々バラバラに行われていたアフリカ研究の横の連絡をはかつて、日本におけるアフリカ研究者をすべて網羅(もうら)できるような学会の設立を考えることは、自然のなりゆきであり、また海外のアフリカ研究者たちとの学術情報、研究資料交換の窓口として、全日本的な学会の必要が痛感されてきたのである。

地域研究が主題

アフリカ学会は、アフリカの地域研究を主題とする学会なので、その学術的関心は、アフリカの人文、社会のすべてにおよび、またそれらを理解するための環境としての自然を研究する人々も参加する予定である。“地域研究”が一つの専門体系として成立するかどうか、またそのアプローチの態度がいかにあるべきかは、大いに議論のあるところであろうが、アフリカのように、極端な経済的、政治的發展段階の格差がその内部にあり、その言語、宗教にしても変化のきわめて多いところでは、近代社会を扱うために発達してきた人文、社会科学の理論ではわりきれないものも多々ある。また、アフリカニストといわれる西欧のアフリカ研究者とは異り、従来アフリカとは、何らの政治的ハンディキャップのない日本人は、独自のアフリカ社会の分析ができるはずである。

研究者の参加を

アフリカ学会は、英、仏の類似の学会のように“サハラ以南のアフリカ”のみを扱わず、北アフリカをも当然ふくめて全アフリカ大陸及びその周辺の島嶼(とうしょ)を扱う。この広大な地域の理解には、他の大陸との比較研究、中東、ヨーロッパとの関係、戦後新しくアフリカ研究の分野にのりだしてきたソビエト、中国及び米国との関係なども考慮に入れねばならず、地域的にもアフリカのみを孤立して扱うことができない。

精神的風土の全く異なる日本において、アフリカの研究を進めてゆくことは容易な道ではない。関連する学術研究機関、学会などの協力と、新しいアフリカ研究のあり方を考えようとする有為の研究者の参加をお願いし、小さな一里塚(づか)を日本の風土の中に築いてゆきたいものである。

(東大助教授)

資料3

浦野起央「日本アフリカ学会創立大会 学会の誕生と大会報告」(1964)

『月刊アフリカ』4巻6号、68—69頁、1964年6月。

本誌にも詳報したように、本年早々、着々と準備を重ねてきたアフリカ学会の創立が、四月一二日の第一回大会で決まった。この日本アフリカ学会の誕生については、既に発起人の一人東京大学助教授小堀巖氏が朝日新聞、昭和三十九年四月一〇日号にそのいきさつ、地域研究の方向について書かれているが、要するに、アフリカ地域研究を主題とする自然・人文・社会の諸科学の分野にわたって研究者の参加を求め、「日本における研究の連絡・協力をはかり、国際的な情報交換と研究交流の窓口と」しようとするものであった。

本年一月にアフリカ学会準備会が発足し、三月には今西錦司、岡正雄、小堀巖、中山正善、西野照太郎、長谷川秀治、福永英二、松沢勲ら各氏を発起人代表として広く各分野にわたって学会への参加を求めるに至った。そして、四月一日の発起人会で具体的な討議が重ねられ、翌一二日の大会で会員の賛同をえて正式に発足するに至ったのである。既にアフリカ協会との協力で昨年八月以降研究会を重ねてきたアフリカ研究会は、東アフリカに基地を建設して研究をつづける京都大学アフリカ研究会、また名古屋大学アフリカ調査研究会、天理大学のアフリカ研究グループあるいはアジア経済研究所、アジア・アフリカ研究所などの協力一致体制のもとに、新しい地域学会として日本アフリカ学会が創立された訳である。こうした学会の性格から、関連する学界との横の協力態勢のみならず、各分野にわたる共通課題を総合的にどのよう

に追求していくかも今後の大きな課題となっている。

第一回大会は、四月一二日東京大学理学部講堂で開催されたが、その主題として「アフリカとは何か」という課題を掲げ、各分野からの報告とシンポジウムをもった。この前日一日には記念講演会が東京大学理学部講堂で開かれ、名古屋大学理学部助手諏訪兼位博士の「青ナイル——エチオピア、スーダンの自然——」と東京大学理学部助教授小堀巖氏の「地中海とサハラ」という講演があった。いずれもアフリカ実態調査紀行をもとにそれぞれ専門の学術的立場から話された。(この内容については、諏訪氏の報告は、その一部が本誌に連載されているし、小堀氏の講演も近号に載せられる予定なので省略させていただく。)

「アフリカとは何か」の主題報告は、四つの分野からなされた。午前の報告(一〇時半—一二時半)は、自然と人文の分野から次の三つであった。

「アフリカの自然環境の特質」

座長 都立大学教授 矢沢大二
報告者 東京大学講師 鈴木秀夫

報告の基調は気候学の立場から、アフリカの自然環境をときあかすことにあつた。それは、赤道西風帯の発見によって、低緯度でも西風帯が気候の主役であることが明らかにされてきたことにある。つまり、アフリカ大陸には西側に大山脈がないために、この西風が大陸内部まで侵入し、東西も方向に一樣な気候帯をつくるので、アフリカ大陸はどの大陸よりも明瞭なゾーナルな分布(東西に均一の帯状分布)をもつ。植物あるいは動物の分布もこれに応じてゾーナルであることが、アフリカの特質である。

これと並んで、熱帯気候学の上から、いま一つの特質があげられる。季節的にアフリカ大陸の南端と北端に達する“ヨーロッパ的”西風帯の分布についてである。この分析から、かかる西風帯のために、氷河時代には南北からサハラ砂漠が押し寄せばめられて、その大半は草原であつたと立証される。氷河時代には多くの点で相当に“ヨーロッパ的”風土の条件のもとにあつたとされ、北アフリカを除くという今日の“アフリカの”自然景観はもっと狭いものであつたと解されるという指摘があつた。

アフリカの伝統的社會構造と文化

座長 東京大学助教授 泉靖一

(一) アフリカ文化の特質

報告者 国際キリスト教大学助手 長島信弘

三つの点から社会人類学的アプローチがあつた。第一にアフリカの住民について、人種的、言語的、種族的分類について概観し、第二に人類学における文化の概念について論じられた。とくに第三にアフリカ文化の多様性と等質性のなかでは、伝統的社会の政治組織、王制を中心とする政治的権威のパターンを歴史のプロセスのなかに位置づけることによって、「神なる王」という如き同一の要素が自然や文化的環

境の相違によって地域的にどのような特殊な意味をもつかを明らかにされた。

さらに宗教と世界観からみたアフリカ文化の特性として特に祖先崇拜の意味を明らかにすることによって、アフリカの意識構造に照明を与えられた。

(二) 報告者 東洋大学助教授 高橋統一

前者の報告のあとを受けて、英・米の社会人類学的アプローチを跡づけされた。その調査研究は、エスノグラフィ(民族誌)や理論的著作をつづいて達せられつつあるが、部族社会の実態把握という今後の研究視点としては、第一に家族・親族・結婚をめぐる社会構造であり、第二に文化的価値態度体系というレベルでの全体的角度からの観察である。とくに前者の指標として、リネエジ分枝組織と年齢階梯制ないし年齢集団、あるいは、二重出自と秘密結社ないし男子結社をとりあげることによって社会組織の諸形態を明らかにされ、現状での問題点を掘り上げられた。

午後の報告(一時半―三時半)は、社会科学の分野から次の二つであった。

アフリカの経済構造の特質

座長 一橋大学教授 山田秀雄

報告者 愛知学院大学講師 岩城剛

アフリカ経済の最大の特徴として、経済の二重性を指摘され、自給自足的原住民経済と近代的貨幣経済とは明白に区別された形で並存しているといわれる。この並存経済をいかに開発するか、自給自足的原住民経済の商業化―原住民農業経済の開発、農業生産性の上昇―と近代的貨幣経済の工業化―貨幣経済の多様化、対外的依存度の低減―の相関的開発にこそ、均整成長が所在している。

ついで、アフリカの工業化について、ある製品については各国別に小規模に生産するが、資本財の生産については、大規模な市場、資源が前提されなくてはならず、経済統合を必要とする。経済統合の効果は、単なる工業化の面だけでなく、経済・社会的不均衡の是正、基礎構造部門の共同開発、政治的・経済的バーゲン・パウワの強化をもたらすものである。これまで東アフリカ共同市場の例もあるが、かえって域内の社会的・経済的不均衡が拡大されているのが現状であるから、各国開発政策の調整、計画的工業化の実施と相まって全アフリカの規模で推進されるのが望ましいと結ばれた。

アフリカの政治体制の特質

座長 国立国会図書館 西野照太郎

報告者 日本大学講師 浦野起央

つい近年までのアフリカ政治論は、アジア問題の範疇で論じられ、植民地問題の一環として「サハラ以南のアフリカ」という植民地主義的アプローチに立つヘイレーの「アフリカ概説」に代表されていた。しかし、全アフリカの連帯のもとでアフリカ人問題が論ぜられるに及んで、旧来のアプローチは止揚され、西方的理念の導入という視座から転嫁されてアフリカ的政治実験それ自体を課題とした。

こうした状況下の思考論理として、トライバリズムの再評価、ナショナリズムの集権性、パン・アフリカの意識の三つをとりあげる。就中、トライバルな意識をパン・アフリカの連帯のなかに昇華させるという方向づけを示した。

そこに展開される政治体制の重要なファクターとして、超階級的性格に特徴づけられる政治組織への一元的結集を論じ、その権力構造と「民主的集中」機能―組織論と運動論の接合による党と人民との関係―をホブズ的思考論理と比定しつつ新生国家のモデル理論として位置づけた大統領の権力集中にみられるそうしたアフリカ型政治形態は、大衆的支持がその正当性をささえるという「アフリカ特有の寄与」として解明してみる必要があると展望した。

以上の報告をもとにシンポジウム(午後三時半―五時半)が泉靖一助教授の司会で進められたが、とりあげられたいくつかの論点をあげれば以下の通りであった。①アフリカの文化は停滞しているかどうかについて―現在の停滞の始まりを、オリエント世界における高度の進歩に対応するものがなくムギ栽培の可能性の乏しい点などに求められた(長島)。②封建国家の形成について―スーダンの諸王国がそれで、対等な意識でヨーロッパと交流していた(長島、西野)。③アフリカ分割の評価―大国間の処理の見方とともに抵抗を弱くする見方もとりあげられなくてはならない(板垣雄三)。④アフリカにおける民族形成―今までのところネーション意識は弱く必ずしもネーションは形成されていない(長島、浦野)。こうした討議から隣接分野にわたる共同研究の必要が強く感じられた。例えば、トライバルな意識についての社会人類学と政治学の共同分析あるいはアフリカの自然的条件と人為的開発についての地理学と経済学の討議など、

今後の研究態勢を進めていくうえでいくつかの示唆を投げかけていると思われた。

〔附記〕日本アフリカ学会は、年次的に研究大会をもつほか分野別あるいは地域単位で研究会を開催することになろうが、機関誌として「アフリカ研究」を刊行する予定になっている。

学会事務所は、東京都文京区本富士町東京大学理学部地理学教室内におかれている。入会希望者は、当学会あて入会申込みたい。年会費は一、五〇〇円（機関誌年四冊代・学会費）である。

（浦野起央記）

資料 4

長谷川秀治「発刊の辞」(1964)

『アフリカ研究』第1号、1-2頁、1964年。

アフリカに関心をもたれる皆様のご協力によって、日本アフリカ学会が今春発足をみましたことは、御同慶の至りであります。しかし、学会は発足いたしましても、わが国におけるアフリカ研究の現状は、まだまだ諸外国に比して低い水準に停滞しております。着実に研究組織を整え、この低い水準を引き上げることにより、わが国のアフリカ研究ははじめて国際的な交流の場に出ることができると思います。

日本アフリカ学会の会員になられた皆さんは、それぞれ自分の研究を発表する機構をもっていられるとは思いますが、しかし、その発表手段がもっている性格に制約されて、十分に掘り下げた専門的な快心の論文が必ずしも陽の目を見ないことは、多くの研究者が痛感している悩みであると思われます。そうした論文を発表できてこそ、わが国のアフリカ研究の質的な向上が、はじめて期待できるようになると信ずるものであります。この信念にもとづいて、日本アフリカ学会は学会にふさわしい機関誌をもち、会員の皆さんに研究発表の機会を提供することが、学会として最も重要な責務であると考えます。

アフリカ研究の先進国といわれるイギリスでは、長い伝統をもつアフリカ研究機関が、早くからアフリカ専門の学術雑誌をもっておりました。しかし、最近になって全国の大学や研究所に、アフリカ研究者が数多く輩出しはじめたために、全イギリスのアフリカ研究者の学会として、African Studies Association of the

U.K.が昨年設立されました。そして昨年末から機関誌の発行をはじめております。想うにわが日本アフリカ学会の機関誌は、イギリスでは早くから刊行されていた専門誌と、イギリスの全国的な情報交換誌としてのAfrican Studies Associationの新しい機関誌と、二つの異質な性格を兼ね備えたものにならなければならない、という悩みを背負わされているといえるかも知れません。

日本アフリカ学会としては、別にすでに御存知の「会報」を刊行しておりますので、ここに新しく発刊の運びになった「アフリカ研究」は、「会報」と両々相まつことによりまして、上記の悩みをできるだけ解決していきたいと考えております。

「アフリカ研究」は季刊としたい所存ではありますが、資金面とのかね合いもあり、今のところはつきり季刊をお約束できないことは、非常に残念に存じております。会員の皆さんの熱心な御協力を期待しながら、できるだけ季刊の形を実現したいと希望しております。どうか会員の研究発表機関として、この「アフリカ研究」を育てるために、皆さんが力を合わせてゆく事を御願い致します。

昭和39年10月

長谷川秀治

資料 5

西野照太郎「創刊のことは」(1963)

アフリカ研究会『アフリカ研究』第1巻第1号、3-4頁、1963年。

アフリカに対する関心が今日ほど高まったとは、日本の歴史では空前のことといわなければならない。昭和初年から十年ほどの間にも、一種の「アフリカ・ブーム」といえる現象が見られ、多くの経済調査団がアフリカを訪れ、数多くのアフリカ関係の資料が刊行され、昭和15年にはアフリカ在駐の6領事館の管轄下に、男99人、女56人の日本人が在留していた。しかし、昭和10年頃のアフリカへの関心といえども、今日の状態に比べれば全く比較にならないものであった。

とくに、多くの大学が学生たちの視察団をアフリカに送り、また、京都大学やアジア経済研究所が現地には有能な学徒を派遣し、アジア・アフリカ連帯委員会は多くの代表をアフリカでの会議に参加させるが、こうしたことは昭和10年頃には全く考えられなかった。しかし、このアフリカへの関心の高まりにもかかわらず、アフリカ大陸のもっている複雑な諸問題について、学問的な調査研究はまだほとんど見るべきものがない。時事問題のジャーナリスト的な解説的著述や、外国人の執筆した文献の翻訳が重視されているのが、従来の日本におけるアフリカ研究の現状だといえる。

昨年末にガーナ・アツクラにおいて、第一回国際アフリカニスト会議が開かれてから、日本においてのアフリカ研究のセンターとなるべき組織が、アフリカに関心をもつ人たちの間に要望されている。アフリカ研究者たちはそれぞれの発表機関をもつて育ててきているけれども、それを広く日本のアフリカ研究者の共有

の財産とし、すべてのアフリカ研究者が情報を交換しうる定期刊行物が、現代ではどうしても必要となつてきた。

私たちが「アフリカ研究会」とその組織をつくつたのも、その機関誌として不満足ながら「アフリカ研究」を、こんな形で発刊しようとするのも、このような事情にもとづくものである。幸にも、日本におけるアフリカ友好親善機関であるアフリカ協会の協力・支援もあつて、ようやく研究体制をかため、その機関誌を発刊できるに至つた。

この「アフリカ研究会」を来春には、正式に、日本の「アフリカ学会」The Association of African Studiesに発展させ、この雑誌はその機関誌 The Journal of African Studies にしたい、というのが私たちの心構えである。それをやがてはイギリスで本年から刊行されている雑誌 The Journal of Modern African Studies に比肩されるものに育てるのが念願である。そのためには、私たち自身があらゆる努力を惜まないことはいうまでもないが、アフリカ研究に関心をもたれる日本のすべてのかたがたに、積極的な御協力を期待し、お願いしたいと考えている。

1963年11月

アフリカ研究会代表
西野照太郎



資料 6

第4回学術大会集合写真(1967年4月、京都国際会議場)

(国立民族学博物館梅棹資料室所蔵)

資料 7

第4回学術大会集合写真対応氏名

(国立民族学博物館梅棹資料室所蔵)

- | | | | | |
|---------|---------|----------|---------|----------|
| 1 葉山杉夫 | 8 伊谷純一郎 | 15 望月通 | 28 掛谷誠 | 41 藤岡喜愛 |
| 2 宮本弘道 | 9 梅棹忠夫 | 16 和田祐一 | 29 砂子喜実 | 42 小杉圭子 |
| 3 安藤勝美 | 10 小堀巖 | 17 鈴木晃 | 30 直原利夫 | 43 福井勝義 |
| 4 今西錦司 | 11 谷口穰 | 18 宮本正興 | 31 細見真也 | 44 中村満次郎 |
| 5 織田武雄 | 12 岩城剛 | 19 五島忠久 | 32 宝来聡 | 45 和田正平 |
| 6 松沢勲 | 13 赤阪賢 | 20 浦野起央 | 33 篠原徹 | 46 日野舜也 |
| 7 西野照太郎 | 14 松原正毅 | 21 諏訪兼位 | 34 九野慎 | 47 小松三郎 |
| | | 22 青山道夫 | 35 北尾尚敬 | 48 米山俊直 |
| | | 23 寺阪昭信 | 36 向井俊雄 | 49 由比浜省吾 |
| | | 24 三井公彦 | 37 木幡昭七 | 50 谷泰 |
| | | 25 丸本康子 | 38 木村重信 | 51 清水幸子 |
| | | 26 佐々木高明 | 39 石毛直道 | 52 佐藤昌章 |
| | | 27 西田利貞 | 40 高木隆郎 | 53 富田浩造 |



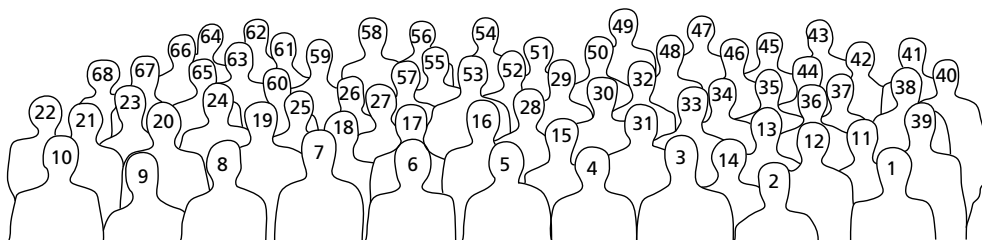
54 三橋郁雄
55 吉田昌夫
56 西村滋人

57 田中莊一
58 瀬戸口烈司
59 河端政一

60 富川盛道
61 岡本州弘
62 野村成二

63 土肥昭夫
64 宇佐波雄策
65 中村弘光

66 片山一道
67 端信行
68 田村直子



日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会
「アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する」参考資料

日本アフリカ学会の創立に関わった諸団体と人々

2013年5月25日発行

著者 川端正久・北川勝彦・栗本英世
編集・発行 日本アフリカ学会創立50周年記念事業実施委員会
制作 有限会社ブックポケット

©2013 Japan Association for African Studies

日本アフリカ学会の 創立に関わった諸団体と人々

日本アフリカ学会創立50周年記念公開講演会

「アフリカ研究の誕生——学会創立前後を回顧する」参考資料

2013年5月25日

東京大学駒場キャンパス13号館1323教室

